

聖書：マルコの福音書 2：18～22

説教題：新しい皮袋

日時：2025 年 6 月 22 日（朝拝）

イエス様とその弟子たちの生活には当時の宗教的な人々と異なるいくつかの特徴が見られました。その一つがここで取り上げられている「断食」に関することです。ヨハネの弟子たちやパリサイ人たちは断食を行っていました。まず、ヨハネは悔い改めを求める預言者で、その悔い改めとセットで断食が行われていたと考えられます。それに加えて、この時点でヨハネはすでにヘロデによって捕らえられており、その弟子たちからは取り去られていました。そのことを嘆いて一層断食の生活が行われていたと考えられます。一方のパリサイ人たちは律法を熱心を守るために自分たちを分離していた人たちで、律法は年 1 回の断食を命じるのみでしたが、彼らは週に二度の断食を行っていました。ルカの福音書 18 章に出て来るパリサイ人と取税人の祈りのたとえにおいてもパリサイ人は「私は週に二度断食し」と語っています。このように宗教的な人々が断食しているのに対して、なぜあなたの弟子たちは断食しないのですか？とある人々がイエス様に問うて来ました。これは前回の話と関係があるのかもしれませんが。イエス様はレビの家で取税人や罪人たちと食卓の交わりをしました。それは神の国の祝宴を先取りするものでもありました。確かにそれは断食とは正反対の光景です。そこである人々は問うたわけです。なぜあなたがたは断食しないのですか？敬虔な人々の間で見られるこのしるしが、なぜあなたがたには見られないのですか？と。これに対してイエス様は二つのたとえをもって答えて行かれます。

まず一つ目は花婿と花婿に付き添う友人たちのたとえです。ここでイエス様はご自身を花婿にたとえられました。そしてご自身の到来が結婚披露宴のような「喜びの時」の到来であることを示しておられます。当時のユダヤの結婚式は一週間にも渡る祝宴でした。それは人々にとってこの上ない喜びの時、まさに祝祭の時でした。そのような「喜びの時」が今まさに地上に来ている。イエス様によって神の国、すなわち神の恵み深いご支配が始まった。人々が待ち望んだ「花婿」、すなわち約束のメシアがここに来られた。だから今は断食にふさわしい時ではないのだとイエス様は言われたのです。目の前におられるイエス・キリストとは誰であり、その方がもたらしている神の国の祝福とは何なのか。それを正しく知るなら、この方を迎えた者たちの生活の中心にあるべきものは喜びであるとイエス様ははっきり言われたのです。

しかしイエス様はこうも言われました。「しかし、彼らから花婿が取り去られる日が来ます。その日には断食をします」と。これはいつのことを指しているのでしょうか。ここで使われている「取り去られる」という言葉には強い意味合いがあります。これは強制的に、あるいは暴力的にそうされるというニュアンスを含んだ言葉です。ですからこれはイエス様がやがて捕らえられて十字架につけられる時のことを指していると考えられます。そのような悲しみの日が来る。その日は断食にふさわしいとイエス様は言われたのです。ここから分かるのは、イエス様がすでにこの日を見据えておられたということです。十字架はイエス様にとって予期しなかったハプニングではありませんでした。むしろそれは最初から神のご計画の中に含まれていました。そして重要な視点は単にそういう時が来ることをイエス様は知っておられたというだけではなく、その十字架の苦しみや悲しみを通して神の国の祝福は地にもたらされるということです。私たちが神の国の祝福にあずかり、その恵みに生きることができるのは、メシアが暴力的に取り去られ、死にまでも服してくださるからです。そのような日がやがて遠からずやって来る。その苦しみの出来事を通して結婚披露宴のような喜びの世界が完全に地上に実現するのです。

これは今日の私たちにも当てはまることです。イエス様は断食そのものを否定されたわけではありません。実際、この福音書に続く「使徒の働き」を見ても、使徒たちがしばしば断食し、祈っていたことが記されています。神の国の祝福にあずかり始めたとは言え、やがての救いの完成の日まではなお戦いがあり、悲しみの日があります。また神に熱心に祈り、自分自身をささげるために断食が助けになる場面もあるでしょう。そのことまでは否定されていません。しかし今日の箇所で強調されているのは、イエス様とともに神の国は到来し始めたということです。神の国は何よりも喜びによって特徴づけられるものであり、その祝福は地に臨み始めているということです。私たちの生活にこの特徴は現れているでしょうか。この花婿を迎えた者たちらしい歩み、結婚披露宴に参列している者らしい歩みが見られるでしょうか。まずそのことを教えられたいと思います。

後半のたとえも同じメッセージを伝えています。イエス様は「真新しい布切れで古い衣に継ぎを当てたりはしません」と言われました。新しい布切れはまだ縮んでいないため、古い部分を引っ張り、かえってその衣を引き裂いてしまうことになります。

新しい布切れにはそのような躍動感あるいは生命力といったものがあります。新しいぶどう酒も同じです。新しいぶどう酒はまだ発酵が進む段階にあるため、古い皮袋に入れたら固くて弾力性のない皮袋を裂くことになりかねません。つまり新しいものと古いものを無理に一緒にしようとしてもうまくは行かないのです。それどこから両方をダメにしてしまいます。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れなければなりません。さてこれは何を言っているのでしょうか。

まず古い皮袋とは何かを正しく理解したいと思います。これは単に「時間的に古いもの」や「伝統的なやり方」という意味ではありません。実は今日の箇所はしばしば何か新しいことを始めたい人によって都合良く使われやすい箇所でもあります。「新しいぶどう酒は新しい皮袋に」と言って、自分たちの考える新しいやり方を正当化し、従来のをやり方を「古いから」と切り捨てようとするのです。しかしここで語られている「古い」あるいは「新しい」という区別はキリストが来られる「前」と「後」という神の救いの歴史の視点から語られています。この視点を見失わないことがとても大切です。つまり古い皮袋とはキリストがすでに来ているのに、その到来を受け止めない以前のあり方・生活様式を指しているのです。先に見たヨハネの弟子たちは悔い改めとセットで断食をしていました。それ自体は悪いことではありません。しかしヨハネが指し示した「間もなく来る方」、そのキリストはすでに来ています！にもかかわらず、これまでの断食生活にとどまり、なぜイエスの弟子たちも同じようにしないのかと問うことは的外れな問いなのです。それはすでに新しい時代が始まっているのに古い皮袋のまま生きようとする姿勢なのです。またパリサイ人たちは律法を守ることに非常に熱心な人々でした。その熱心さゆえに、律法を確実に守るために律法の周りに「垣根」となるような数多くのルールを設けて行きました。それらは本来律法の助けとなるべきものでしたが、やがてそれらは形式化し、硬直化し、聖書を越えて人々に重荷を負わせるものとなっていました。そんな中、律法が本来指し示していたイエス様ご自身が目の前におられるのに、そのイエス様に目を向けずに、これまでの生活様式を維持し続けようとするのが古い皮袋にとどまることなのです。このように当時の宗教的な人々のあり方を基準とし、それを絶対視して、維持しようとするところには、イエス様がもたらされた神の国の喜びが入り込む余地がありません。硬くなった古い皮袋に新しいぶどう酒を入れたらどうなるでしょうか。皮袋は裂け、ぶどう酒も皮袋も、両方とも台無しになります。イエス様はこのように、新しく到来したご自身を受け入れようとしない従来固定化した宗教的あり方を「古い皮袋」と呼んでおら

れるのです。

では反対に新しい皮袋とは何でしょうか。それは神の国の祝福を伴って来られたキリストを受け入れ、この方を喜びつつ生きる新しい生活様式・ライフスタイルのことです。ここで大切なのは「新しい皮袋」とは、単に時間的に新しいという意味ではなく、キリストの到来に根ざした新しさであるという点です。神はかねてから約束して来られたメシアをついにこの世界に遣わし、この御子キリストにあって最終的な啓示を私たちに与えておられます。これまでは「約束」であったものがキリストの到来によって「成就」となり、歴史の中に現れ始めました。その結果、世界は決定的に新しい局面に入りました。神の国が到来し始めたのです。この意味での「新しさ」が、ここで言われている新しさです。ですから、「新しい皮袋」とは「今日の時代に合っているかどうか」とか「最新の流行を取り入れているかどうか」ではありません。たとえば礼拝を現代人の感覚に合わせて変えること、それが「新しい皮袋」というわけではありません。また伝統的な礼拝の形式や長く歌われて来た賛美歌を捨てること、それが「新しさ」だと考えるのも聖書からはズレています。たとえそれが古くから歌い継がれて来た賛美歌であっても、キリストにおいて明らかにされた神の救いのみわざを覚えて心から感謝してささげられる賛美であれば、それは「新しい歌」なのです。逆にいくら現代的なメロディーを用いたとしても、それが福音に根差していないものであれば、表面的に新しい感じがしても、聖書が言うところの「新しい歌」とは言えません。大切なのはキリストがもたらした福音に根ざした「新しさ」であるかどうか。この新しさはどれほど時間が経っても古びることなく、永遠に続く真の新しさなのです。

では、この「新しさ」にはどのような特徴が見られるのでしょうか。先ほどイエス様とともに到来した神の国が結婚披露宴にたとえられるような喜びで特徴づけられることを見ました。その喜びとは具体的にはどのような喜びなのでしょう。それを考えることで、この福音がもたらす「新しさ」の中身をより味わうことができます。ここでは短く箇条書き的にまとめてみたいと思います。一つ目は「罪が赦される喜び」です。前々回に読んだ2章最初の記事でイエス様は「罪を赦す権威を持つ方」であることが示されました。この方によって私たちは神の御前で罪を赦されるという恵みにあずかることができます。もはや神から責められることがなく、最後のさばきにおける断罪と永遠の滅びから解放されています。この喜びは何ものにも代えがたい

ものです。二つ目は「神に受け入れられ、神と交わる喜び」です。前回読んだ箇所、取税人レビや彼の友達はこの喜びを味わいました。罪人であった者が神に受け入れられ、神と交わる生活に生きる。これこそ人間に深い喜びと満たしを与えるものです。三つ目は「共同体の喜び」です。私たちは神と交わるだけでなく、ともに神の前に罪赦された者たちとの間に広がる横の交わり、共同体の交わりにも生かされます。前回のレビの家での食事会もそうでした。彼らはただイエス様と交わっただけではなく、そこへ招かれた者たちと喜びを共有する祝福も経験したでしょう。今日の箇所の婚披露宴のたとえもそうです。結婚披露宴は一人一人が花婿との間でだけ喜ぶものではなく、そこに集まった友達との間で喜びを分かち合い、共有する時でもあります。そして四つ目は「聖められる喜び」です。罪を赦され、神に受け入れられるだけでなく、神が本来意図された聖い状態へと造り変えられ、回復されて行くのです。そのプロセスに生かされるのです。そして五つ目は今ここで味わって神の国の最終的完成としての天の御国へ、永遠のいのちを与えられて、導き入れられるという喜びです。このようなキリストの福音がもたらす新しい喜びに対応する新しい生活、新しいライフスタイルがあるのです。それはキリストが来られる以前の、従来の枠に収められるようなものではないのです。

最後に念のために一つ確認しておきたいことがあります。それはイエス様の今日の言葉は決して旧約聖書や旧約の律法を投げ捨てるものではないということです。一見そのような勢いが感じられる言葉ではありますが。しかしイエス様はたとえばマタイの福音書5章17節で次のように言われました。「わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思ってはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」そしてイエス様は至るところで神の律法の真意を説き明かしておられます。そういう意味では、イエス様がもたらす喜びに満ちた新しい生活とは真の意味で律法に合致する生活と言えます。クリスチャンとは罪を赦された喜びをもって気の赴くまま、どこに飛んで行くか分からない人ではなく、福音の力と聖霊の導きにより、益々律法に沿った歩みへと進んで行く人なのです。そしてそのような歩みにこそ人間本来のあり方への回復があり、そ真の自由と喜びがあるのです。イエス様はそのような新しい歩みへと恵みの力によって私たちを導いてくださいます。

私たちの生活は新しい皮袋にたとえられるものでしょうか。今日見て来ましたように、新しい皮袋とは「時間的に新しい」とか「現代文化に合っている」とか、あるい

は「最新の流行に乗っかっている」という意味ではありません。新しい皮袋とはキリストの福音に根差す生活のことです。ともすると私たちの生活も硬化しやすいものです。いつの間にか人間の教えや規則、あるいは常識を大事にして硬直化しやすいものです。福音のいのちを見失い、福音を中に入れたら破裂しそうな堅い皮袋になっているということはある得ることです。そうならないために大切なことはキリストの福音に聞き続けることです。福音がもたらす神の国の喜びを知り、そのいのちに生かされ続けることです。そしてその福音の力によって、いよいよ律法を全うする歩みへと進むことです。私たちの生活がそのように福音を内に宿し、福音のメッセージに導かれる「新しい皮袋」であり続けることができますように。そしてその生活を通して結婚披露宴にもたとえられる喜びの世界が来ていることを人々に示し、この幸いへと人々を招く主の共同体である教会の歩みへ導かれて行きたいと思います。